

記紀歌謡から万葉和歌へ

——場の問題を中心にして——

曾 倉 岑

与えられたテーマは「記紀歌謡と万葉との間」であり、その中心的課題は両者の間に断絶を認めるかそれとも連続を認めるかにあるが、テーマ自体の解釈やアプローチのし方は発表者にまかせるとのことであった。よって、ここではテーマを「記紀歌謡から万葉和歌へ」と解釈することにした。さらに、記紀歌謡を古事記及び日本書紀に収める歌の意ではなく、本来歌謡でありかつ記紀に記録された歌の意としたい。従って、明らかに創作歌と認められるもの——たとえば書紀の終りの方に記す数首や土橋寛氏の言われる狭義の物語歌など——は除かれることになる。同様に、万葉和歌を万葉集に収める歌の意ではなく、和歌であって万葉集に収録された歌の意としたい。従って、本来歌謡であったと考えられるもの——たとえば東歌の一部や卷十六所載の地方歌謡など——は除かれることになる。右のように限定するならば、「記紀歌謡から万葉和歌へ」は「歌謡から和歌へ」と等しくなる。

歌謡と和歌とを区別する基準をうたわれるか否かに置き、歌謡を口誦文学、和歌を記載文学とするのが現在普通の考え方である。ここでもこの基準に従ったが、しかしこれは一応の基準であって、かなり有効とは言え、完全とは言えない。うたわれるか否かが問題になるのは主として表出、受容についてであるが、うたうという形で表出、受容された歌のすべてが歌謡と言うことができないからである。たとえば、柿本人麻呂の殯宮挽歌は殯宮儀礼の場——その限定できないとしても広義の葬儀にかかわる場——でうたわれたと考えられる（あるいは誦詠にとどまるかも知れないが、ここではうたわれたとする）。この点からこれらを歌謡をみる立場も十分成り立ちうるが、普通は和歌とする立場を

とる。それは、これらの歌の持つ歌謡との共通性・等質性よりは相違性・異質性の方が本質的により重要だと認めるからである。

歌謡と和歌とを区別する重要な基準がうたわれるか否かであることを否定することはできないであろう。しかし、それだけでは不十分である。歌謡から和歌が成立するためには他にいかなる条件が必要であったか、両者の間にいかなる相違がもたらされたか。この点につき、場の問題を中心にして考えることにしたい。場の問題をとりあげるのは歌謡にとって場はきわめて重要であり、和歌少なくとも初期の和歌にとってもかなり重要だと思われるからである。

二

記紀歌謡の重要な場として国見・歌垣が指摘されている。その内、国見歌として、

大和は 国のまほろば 畳なづく 青垣 山ごもれる 大和しうるはし(記三〇)

を始めとして何首かの歌謡をあげることができる。これに対して、万葉集の国見歌は次の一首しかない。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は

鷗立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は(巻一・二)

この作者が舒明天皇という万葉集中作者のほぼ確実な最古の歌人であること(伝誦歌を舒明天皇に仮託したとする説もある)及び記紀歌謡と万葉集の歌数の圧倒的な違いを考えるならば、国見はもはや万葉和歌の場ではなくなつたと言つてよいであろう。

と言つても、国見そのものがなくなつたのではない。国見やそれに類する行事が後代まで行なわれていたことは確かである。丹比国人が「国見する筑波の山を」(巻三・三八二)とうたったように民間での国見は依然として行なわれた。あるいはそこに貴族、官僚たちが参加することはあったかも知れないが、土地を予祝し生産力を高めようとする国見歌そのものは作られていないのである。国見歌的発想や表現が断絶したわけでもない。それらは、たとえば人麻呂の吉野讚歌や黒人の叙景歌などに取り入れられている。しかし、国見歌そのものではない。国見歌を手がかりとする限りにおいて、記紀歌謡の場が生産の場、民衆の場に密着していたのに対して、万葉和歌の場は非生産の場、宮廷

的場に傾斜していると言えるであろう。

歌垣の歌と考えられるものは万葉集にもある。たとえば、

三島菅　いまだ苗なれ　時待たば　着ずやなりなむ　三島菅笠（卷十一・二八三六）

これは撰津三島地方の歌垣の歌謡と思われるが、この類の歌を、最初の限定に従って万葉和歌から除外するならば、記紀歌謡の歌垣の歌に対応するものは相聞の歌である。対応するというよりは、歌垣の歌から相聞の歌が成立したと言ふべきであろう。たとえば、

玉葛実ならね木にはちはやぶる神そ著くとふならね木ごとに（卷二・一〇二）

玉葛花のみ咲きてならざるは誰が恋ならめ吾は恋ひ思ふを（卷二・一〇二）

の相聞は、からかいつつ結婚を迫る男の歌とこれをやりかえず女の歌とから成り、その点、歌垣の歌と同じと言えよう。すなわち、求婚とそれへの対応という現実的機能を果している点で両者は共通する。しかし、場の点からみると両者の相違ははなはだしい。歌垣は集団的行事であり、その歌も基本的には集団的にうたいかわされたと考えられる。また、そこでの求婚・結婚は、土地の生産力を高める目的をも持っていたと考えられる。これに対して、相聞は生産と直接関係を持たないばかりか、二人だけの場でうたわれるあるいは誦詠されるのである。かなり質の異なる場と言ふことにならう。

右にあげた例は、それでも二人が時間・空間を共有しているが、次の例になるとこの共有性すら失われる。

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを（卷二・九二）

秋山の木の下隠り行く水の我こそまさめ思はずよりは（卷二・九二）

この段階に至れば歌の場は必要なくなった、逆に場を持たない歌となったと言つてよいであろう。この延長線上に対詠性すら持たない一人の世界の歌、すなわち独詠歌が作られることになる。額田王の次の歌は、そのもっとも早い例である。

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く（卷四・四八八）

次に場の性格は同じであるが、歌の性格の異なる例として宮廷寿歌と讃歌とをあげたい。

つきねふや 山城川を 川のぼり 我がのぼれば 川の辺に 生ひ立てる 烏草樹を 烏草樹の木 其が下に
生ひ立てる 葉広 ゆつ真椿 其が花の 照り坐し 其が葉の 広り坐すは 大君ろかも(記五七)

この歌は仁徳天皇の皇后イワノヒメが山城川をさかのぼる時にうたったと記紀に記されており、そのため初四句は後から挿入されたとする説もあるが、上代歌謡一般の例から言っても、また類句を持つ次の歌、

大和の この高市に 小高る 市のつかさ 新嘗屋に 生ひ立てる 葉広 ゆつ真椿 其が葉の 広り坐し
その花の 照り坐す 高光る 日の御子に 豊御酒 献らせ 事の語り言も こをば(記一〇一)

の冒頭にも地名の入っている点からも、挿入よりは地名を中心とする部分の改変を考えた方が良いと思う。

この歌謡はある土地で天皇の命をことほぐ儀礼歌であり、そのことほぎ方は椿という植物の花と葉にたとえることによつて行なうのである。この歌と同様の場の歌として人麻呂の吉野讃歌があげられよう。

やすみしし 我大君の 聞こしをす 天の下に 国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を
吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの 大宮人は 船並めて 朝川渡り
舟競ひ 夕河渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らず 水激つ 滝の宮処は 見れど飽か
ぬかも(巻一・三二六)

この歌はある土地(具体的には吉野)での儀礼歌という点では前の歌と同じである。しかし、前の歌が天皇の命を、植物によつてことほぐの対して、この歌は天皇の都の永遠性を山と川とによつて讚美しているのである。前者が素朴な呪術的、民衆的生活を反映しているの対して、後者は宮廷的、政治的、観念的なものを導入している。たとえば前者の「大君」を他のことばに置きかえれば、あるいは「大君」は天皇に限らないとする説に従うならば、これは地方の首長、場合によつては一般人の命をことほぐ歌謡として十分用いうる。一方、後者は「我大君」や「大宮人」「宮処」などを他のことばに置きかえても、宮廷讃歌以外の何ものでもない。天皇の地位の絶対化、知的、知識的な

要素の導入の度合等、両者をとりまく生活の差は相当大きいとみなくてはなるまい。

右の二首の相違は、それをとりまく生活にのみ存するのではない。歌のあり方そのものにより重要な相違があると思われる。古事記の歌は、前述のように初四句ないし五句に問題があり確定的なことは言えないが、仮にこれが入れ替え可能な部分であったと考えるならば、地名とそれにかかわる表現を改変することによって、いかなる土地においてもうたえることになる。地名の改変された例は前に引いた記一〇一に認められるし、歌謡一般については指摘されるところでもある。これに対して、人麻呂の歌は吉野の自然を具体的かつ的確にのみみ込んでいるため、かえって他の場所での転用を不可能にしている。それどころか、人麻呂以降にも金村・赤人・千年・旅人・家持らが吉野讃歌を作っている。すなわち、歌謡は歌詞そのままか歌詞の一部を改変するかして、同一の場で何度でも、また別の場所でも用いられるのに対して、和歌は同じ場所であっても原則として一つ一つの機会に新しく歌が作られるという相違が認められるのである。もっとも「一つ一つの機会」と厳密に言えるわけではない。人麻呂の歌が二度以上の持統行幸でうたわれた可能性を否定できないからである。また、同じ人麻呂の日並皇子への挽歌の二首目の反歌

茜さす日は照らせれどぬば玉の夜渡る月の隠らく惜しも（巻二・一六九）

に「或本以二件歌ニ為ニ後皇子尊殯宮之時歌反也」の注のあることは、この歌が二度用いられたことを積極的に証明しているとみられるからである。しかし、それは和歌が歌謡的な用いられ方をしたというに過ぎないのであって、原則としては一つ一つの機会に作るべきものと考える方が妥当であろう。

四

最後に、葬儀を場とする歌をとりあげたい。古事記は次の四首の歌、

なづきの 田の稻幹に 稻幹に 這い廻るふ 薺葛（記三四）

浅小竹原 腰泥む 空は行かず 足よ行くな（記三五）

海が行けば 腰泥む 大河原の 殖草 海がは いさよふ（記三六）

浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ（記三七）

につき」是の四歌は、皆其の御葬に歌ひき。故、今に至るまで其の歌は天皇の大御葬に歌ふなり」と注している。四首の歌についても注記についても種々の問題があり、多くの説が出されているが、ここでは注記の大御葬を殯宮儀礼を含む広義の葬儀の意とした上で、実際に天皇の「大御葬」に用いられたものと考えておく。一方、万葉集には天皇の死をめぐる九首の歌がある（巻二・一四七―一五五）。天皇の死の直前によまれた一首（一四七）はやゝ性格を異にするので除くとすれば八首になる。この八首は天皇の死後から殯宮時を経て埋葬後御陵退散の時までの歌を集めたものであり、公的・儀礼的性格をもって作られたものと考えられる。従って古事記の四首と万葉集の八首とは葬儀という同一の場においてうたわれていると言えまたその他の共通点も認められるが、同時に相違点も多い。

まず古事記の歌は天皇の大御葬の歌であって特定の天皇のそれでないのに対して、万葉集の歌は天智天皇の葬儀に關して作られたものである。制作意図において天智天皇以外の場合に用いられることを念頭に置いたと考えられないのみならず、「木幡」「志賀の辛崎」「淡海の海」「ささ浪」「山科の鏡の山」など、天智天皇以外には使えない地名を多く含み持っている。転用の能否の点は宮廷寿歌・讚歌の場合と同じである。

第二に、古事記の歌は集団的にうたったと考えられる。「后等及御子等」「后及御子等」をそのまま信ずることができないにしても、複数の人間が同時にうたったとみることにはできるであろう。これに対して天智挽歌群の作者が四人いし五名の後宮の女性によって作られていることは一見前者に類似するかのごとくであるが、実態は一首につき作者は一人であり、その意味では個人がうたったあるいは誦詠したのであり、この点は歌垣と相聞の場合と同じである。

第三に、古事記の歌が、一見して明らかのように農耕的、民衆的表材や表現から成るのに対して、天智挽歌群は「沖放けて 漕ぎ来る船 刃付きて 漕ぎ来る船」（二五三）にあるいは漁民の生活を見うるかも知れない一点を除いては、そのような素材や表現が用いられていない。この点は国見歌や宮廷寿歌・讚歌の場合と同じである。

第四に、第二点の結果として、古事記の歌が集団的感情をうたう（この点については問題があるが後述する）のに対して、天智挽歌群は集団に共通する感情をうたうとは限らない。

人はよし思ひやむとも王鬘影に見えつつ忘らえぬかも（一四九）

右の歌の「人はよし思ひやむとも」は倭太后個人の立場で、個人の感情をよんだものと言わざるをえない。

第五に、古事記の歌は場の規制力を強く受けその結果場の目的に完全に奉仕しているのに対して、天智挽歌群の場合は第四点で指摘したような歌が存在するように、場の規制力がそれ程強くなくその結果場の目的に背反することはないにしても必ずしもそれに奉仕しないようになる。

第六に、古事記の歌は「這ひ廻るふ」「腰泥む」「足よ行くな」「海がはいさよふ」「磯伝ふ」など動作を示す語句が多く、一方、感情を直接的に表現する語句が皆無である。これに対して天智挽歌群には動作性が乏しい。この相違は感情を主として動作で表現し言葉はその補助的位置にとどまることも可能な歌謡と言葉のみがほとんど唯一の表現の媒体である和歌との相違である。そして、前者のごとき方法をとらうるのは歌謡が場の中であって場の規制を強くうけ場の目的に完全に奉仕していればこそであったと考えられる。その歌謡から和歌が成立するに当り、場の規制が緩んだが故に場の目的に完全に奉仕しなくてもよくなりその結果言葉の自立を迫られるようになったのか、それとも個人的感情を表現する意欲の強さが場の規制を相対的に緩める力となったのか、そのいずれをより重視するかが問題であるが、多分そのいずれかではなく両者は表裏の関係をなしつつ同時進行していたのではないかと思われる。

五

以上、場の問題を中心としつつ、歌謡と和歌との相違を検討してきた。もとよりこれだけではきわめて不十分と言わざるをえないが、その範囲内で言えることは、歌謡と和歌とは単にうたわれるか否かという点以外に相当の相違があるということ、及びそれにもかかわらず和歌は歌謡から受けているものが多分にあるということである。従って最初の課題に戻って、記紀歌謡と万葉との間に断絶を認めるかそれとも連続を絶めるかという点については両面あると言えよう。しかし、あえて言うならば、両者の連続の方をより重視し、連続しつつ変化しているという見方をとりたいと思う。